

PHAYAO レポート 2018-02 (山口県立大学・徳島大学)

(2018.8.24~2018.8.30)

シャンティ山口スタディツアーレポート

～同じ目線に立つ大切さ～

山口県立大学大学院 国際文化学研究科 2年

栗栖 尚太郎

昨年と同様、今年もこのスタディツアーに参加させていただいた。昨年は、ここまで長期の海外での滞在は初めてであったため、少なからず不安な部分はあったが、今年は二度目ということもあり、とても楽な気持ちで参加することができた。偶然、佐伯さんと福岡バンコク間の飛行機が同じだったことも、余計に不安を取り除いてくれたのかもしれない。ツアー自体は8月24日から30日までだが、私の大学院での研究について調査したいことがあったり、徳島大学の学生たちとチェンライの大学での発表も予定されていたりしたため、3日前の21日からチェンライ入りした。昨年、チェンライの街中を歩き回っていたこともあり、不自由なくスタディツアーまでの日程を過ごすことができた。

いよいよツアーが始まり、佐伯さんとスタッフのジッポンさんとプーチーファーで合流した。その後シャンティ寮へと向かい、シャンティ寮での生活がスタートする。昨年と少し寮生の顔ぶれが変わっていたが、昨年もいた子たちは私のことを覚えてくれていたのが素直に嬉しかった。今回、佐伯さんに融通を利かせてもらい、私のみ村でのホームステイはせずツアー最終日までシャンティ寮で寮生たちと過ごすことにしてもらっていたので、この子たちと約1週間一緒に生活することになっていた。寮生たちの邪魔にならないか心配だったが、屈託のない笑顔でちょっかいをかけてきたり、本気でサッカーやセパタクローをしたりする中で、その心配は吹き飛んでいた。むしろ、私も寮生の一員のように同じ目線で生活することができたと感じている。それらを踏まえた上で、このレポートでは、徳島大学の学生たちがホイプム村へ行った後、私が一人で寮で生活させてもらった期間のことを主に記していく。

徳島大学の学生たちと一緒にいた期間は、土日であったため寮生たちは学校が休みであった。私が一人で寮にお世話になるのは月曜の午前中からなので、もちろん寮生たちは学校へ行って寮には寮のスタッフしかいない。このタイミングで、私の研究に関する必要な情報等を教えていただくために、私は寮に残ったのだ。

ここで、私の研究について簡潔に説明させていただくと、「寮で販売している刺繍製品を、インターネット上で、彼らの手で販売す



ることによって寮の運営費の足しになったり、村人の生活費の足しになったり、さらには寮生たちが学校では学べないことを学べる』というビジネスモデルを作る。」というものである。販売スペースの現状、郵便配達的环境はどうか、寮生たちはどのような生活をしているのか等を、実際自分の目で見て耳で聴いて体感することで、本当に自分の研究を行う必要があるのか、行うのであれば見込みはあるのかということを確認するために来たのだ。

去年は、初めてということもあり全体的な現状を見るだけで精一杯だったのだが、今年は明確な目的を持って来たため、充実したツアーになった。徳島大学の学生や佐伯さんたちと一緒に寮で生活している間は、私たちが来客としてもてなしてくれるため、“本当の”寮での生活はできていなかったということに気づき、体感できたことも良かったと思える点の一つである。

去年も今年も、私たちに出される食事と寮生たちが食べている食事が異なることには気付いていたが、覗き込んだり写真を撮ったりするようなことはしなかったため、どのように異なるのかまではわかっていなかった。しかし、今回のツアーでは上記でも述べた通り、私一人で寮にお世話になった期間があり、その期間は寮生と同じ料理を食べさせてもらうことができた。あくまで私がいた期間のみのため、いつもではないのかもしれないが、基本的には白米とおかず一品という献立である。ごはんと塩で味付けされた卵焼きのみの日もあった。育ち盛りの中高生が、学校から帰り、農作業やサッカー等をして全力で動いた後に食べる夕食としては少し物足りないとも思うし、栄養の偏りも気になる。この点は改善すべき点だと感じた。



食事面で気付くことができたのは、このような改善点だけではなく、良い点もあった。以前は、寮生たちが田んぼで育てて収穫した新米は売りに出して、そのお金で古米を買って食べていると聞いていたのだが、今は寮生たちが育てた米は寮生たち自身で食べるできるようになったということだ。細かいことはわからないが、これはかなり大きな成長なのではないだろうか。少なからず寮自体が、徐々に良い環境になっていることは間違いないということもわかった。

寮生との生活で更に良くなればよいというよりも、良くしたいと思った点がもう一点ある。それは、登校靴やソールが剥がれかけているスパイクをテープでグルグル巻きにしてサッカーをしている子がいるということだ。「サッカーなんて好きでやっただけなんだから、まず改善すべきなのはそこじゃないだろ。」と思われる方もいるかもしれないが、私はこれがかなり大きなポイントだと思っている。お互いカタコトの英語で、盛り上がり話せたのもヨーロッパサッカーの内容やサッカー中での会話であった。「登校靴やボロボロのスパイクでも、かなり高いスキルやテクニックを見せる彼らが、綺麗なスパイクを履いてサッカーができれば、夢がもっと広がるかもしれない。寮の収入がもっと増えれば、クラブに属するための費用にも充てられるだろう。」そ

をテープでグルグル巻きにしてサッカーをしている子がいるということだ。「サッカーなんて好きでやっただけなんだから、まず改善すべきなのはそこじゃないだろ。」と思われる方もいるかもしれないが、私はこれがかなり大きなポイントだと思っている。お互いカタコトの英語で、盛り上がり話せたのもヨーロッパサッカーの内容やサッカー中での会話であった。「登校靴やボロボロのスパイクでも、かなり高いスキルやテクニックを見せる彼らが、綺麗なスパイクを履いてサッカーができれば、夢がもっと広がるかもしれない。寮の収入がもっと増えれば、クラブに属するための費用にも充てられるだろう。」そ

う思ったからである。学校に行き、ごはんを食べ、しっかり寝る。それはもちろん必要であり最も大切なことだ。しかし、夢を見れる環境であり、その夢を応援される環境の中で生活できるということも、それと同じくらい大切なのではないだろうか。良い大学に行き、良い会社に入り、良い収入を得ることが目的であるならば、勉強をすれば良い。勉強ができる環境であるということは、寮に来ているということや、これまでの卒業生の動向を見てもわかる。あくまで私が見た中での話なのでサッカーを例に挙げたが、サッカーだけに限らず、その他の夢を持った時にそれをサポートもできるようになれば、もっと素晴らしい環境になるのではないかと私は感じたのである。

そのようなことを感じながらも、寮生たちが学校へ行っている間に、当初より大きな目的の一つであった、研究に必要な情報等を教えてもらうこともできた。細かいことについては、このレポートでは述べないが、研究および論文の執筆がより一層捗るだろう。何気ない質問やお願いにも応えてくれたガランさんをはじめとする寮のスタッフの方々、またシーカーアジア財団の方々にも感謝している。

最終日には、寮生たちが通う中学高校で、彼らに「英語で日本語を教える」という予定もあった。私自身現地に着いてからその予定を聞かされ、昨年同様訪問し校内を案内していただいただけだと思っていたため多少焦りはしたが、何とか準備をして徳島大学の学生たちと協力しながら、グダグダながらも終えることができた。「来年から日本語の先生として来てください」というガランさんの冗談を真に受けて、「この子たちに、本当にここで日本語を教えてみたいな」と少し思った自分もいた。

全日程を終え、観光地である白い寺に行ったりお土産を買ったりして、空港まで送っていただいた。昨年同様、安全に私たちを送迎していただいたドライバーの方にも感謝している。その後、チェンライからバンコク、バンコクから福岡、福岡から山口と、無事に移動し帰宅した。

重ね重ねの謝辞にはなるが、今年もツアーを組んでいただき私のわがままにも柔軟に対応していただいたシャンティ山口の佐伯さん、ジッポンさん、約一週間私の滞在を快く受け入れていただいたシャンティ寮のスタッフの皆様、寮生たち、安全に送迎していただいたドライバーさん、その他お世話になった方々には本当に感謝している。ありがとうございました。

これからも、自分なりにできることを模索・挑戦しながら精進していきたいと思う。



「ポンラチャダーピセークー中・高等学校」高校2年生学級での体験学習記念撮影

シャンティ山口の活動の参加を終えて

～初めて現地のひとの生活の場を見て気づいたこと～

徳島大学医学部保健学科看護学専攻 1年 安福 麻実

○はじめに

2018年8月24日から30日までシャンティ山ロスタディーツアーに参加した。はじめの3日間は、シャンティ山口が支援しているシャンティ寮で暮らす中高生の生活を体験した。シャンティ寮で暮らす学生のほとんどはモン族で、自宅から学校へ通えない子供たちが生活している。モン族とは、ラオスの内戦から逃れるためタイ北部へやってきた難民からなる民族である。あとの4日間はホイプム村でホームステイをし、モン族の生活を体験した。ホイプム村は、かつて遺伝子組み換えトウモロコシだけを栽培しており、ほぼすべての山が茶色く荒野のようだったが、シャンティ山口の自立支援によって果樹園へと変化しており実際見てみるとすべての山が緑色になっていた。その果樹園にはとてもたくさんの種類の果物が実っており、どれも新鮮でおいしかった。

○日本とはほぼ異なるホイプム村の水回り

まずホイプム村のトイレは、シャンティ山口の支援によって一家に一つ設置されている。それらのトイレは村人が作り方を教わって自分たちで造ったそうだ。これは村人の自立のためになると考えた。そのトイレは、生活に重要な役目を果たしている。排出物から出るガスを集めて利用したり、タンクに蓄積した排出物の上層に分かれた水分がべつのタンクに運ばれてきれいになっていった水を利用して生活している。そのタンクは地中に埋め込まれているが、実際に見れなかったことが少し残念だった。便器はタイでありふれている普通のものだったが、中にそういう仕組みがあると知って素晴らしい案だと思い感動した。

つぎに、ホイプム村の台所は、寝室とは別に竹格子のかべに土の床でできた建物にある。そして、ガスは通っていないので食料の過熱は薪割りをしてからライターで火をつける。火の調節は薪やトウモロコシの芯の出し入れで行う。日本では、ガスやたくさんの電気が通っておりボタン一つで火をつけることができるのでこの光景を見たときは驚いた。私のホームステイ先の家族はとても若年夫婦で妻は16歳の若さで火を難なく操っているのを見て、感心した。そして、台所のシンクはコンクリートでできており、排水溝は日本のようにゴミ受けはなくパイプですべて流すようになっていた。その流れたものほどこに行くのかは分からなかった。蛇口は細いパイプから繋がっており、その細い割に勢いよく出てきていた。シンクや野菜を切るところの高さはとても低く、お皿を洗う時は腰を曲げて行っていて、私が実際に洗ったときすぐに腰が痛くなった。しかし、村人は慣れているので苦なくこなしていてすごいと思った。

ホイプム村のお風呂は電気やガスがあまりないためシャワーはなく、お湯も出ない。大きなたらいに水をため、その水を風呂桶で身体にかけてお風呂に入るというスタイルである。山の上で雨が続いた少し肌寒い夜にお風呂に入るので水がとても冷たく感じた。現地の人は、裸にならず身体に布を巻いてその上から水をかけて入っていて、私もその入り方を体験した。どう洗ってどう水を流せばよいか分から

なかったが、とても貴重な体験をすることができた。

○最後に

シャンティ寮では中高生のそれぞれの携帯を持っていたので、一緒に動画を撮ったり見たりして遊んだり、バレーボールをしたりして遊んだ。国が違っても日本と同じような遊びで楽しむことができるということが分かった。ホイプム村は、本当に小さな村なので、村人の皆仲が良く、村人は皆周りから愛されているということが分かった。私は、海外留学が初めてだったし、もちろん生活体験も初めてだったので、この七日間は目にしたことすべてが新鮮で貴重な体験をたくさんできてすごく私の世界が広がった。今までにないとても濃い時間を過ごすことができた。

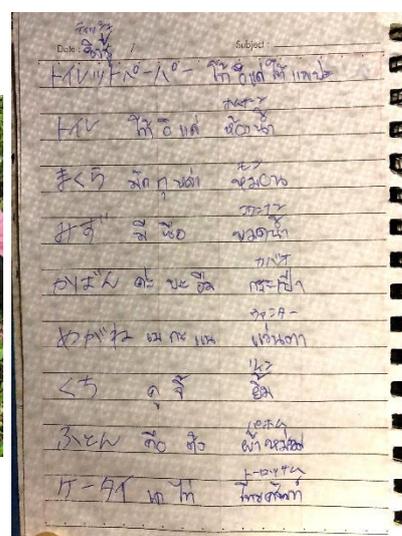
この度は、シャンティ山口の活動に参加させていただきありがとうございました。



ご飯を炊いている



ンゴ（ランブータン）の収穫



お互いの言語でことばも話した



民族衣装を着てモンダンスを踊った（若嫁さんと）



シャンティ寮生とバスで「おでかけ」した

タイ・スタディツアー

～モン族の食事について～

徳島大学 薬学部創製薬科学科1年 松崎 隆朗

この度のタイ・スタディツアーに参加して、現地の中高生たちとの交流や、ホイプム村の方にホームステイさせてもらうことができ、非常に貴重な体験をすることができた。

スタディツアーを通して、私はモン族の方々の食事について興味をもった。

モン族は客人に対し、おもてなしをする精神がありシャンティ寮では寮生たちが食べるご飯とは別のおもてなしの料理をいただくことができた。

シャンティ寮での食事



「パパイヤ」のサラダ



(空心菜の黒豚炒め・野菜、トーフ、はるさめスープ・寮生が育てたタイ米ご飯)

味付けは私たちの舌にもよく合い、美味しくいただくことができた。また、食事が一番驚いたことは、お弁当で食べた豚が寮で育てていたうちの一匹だったことだ。モン族では女は鶏をさばけて、男は豚をさばけて一人前だと聞き、モン族の民族性に触れることができた。

ホイプム村では、ホームステイ先での食事や集会でご飯を頂いた。

ホイプム村には、電気もガスも通っていないため、使う調理場はかまどで、実際に見るのは初めてだったので、新鮮に感じた。

ホイプム村の食事が一番印象に残っているものは、軍鶏の塩ゆでだ。モン族には旅人に昼食を持たせるという風習があり、ホームステイを終えた際に軍鶏をまるまる一匹塩ゆでしたものをもらったときにすごく驚いた。



— 軍鶏のゆであがり —



— かぼちゃスープ・黒豚の煮物・空心菜汁・ご飯（陸稲） —

また、果物にはランブータンやリンチーをいただいた。日本では見ることもほとんどないので、少し食べにくかったが、味は程よい甘さで、どんどん食べることができた。また、いただくことはできなかったが、バナナの花も食べるそうだ。



「シゴ」 = 「ランブータン」



「バナナの花」「キュウリ」

日本とは大きく違う食事を体験することができ、とてもいい体験になったと感じた。

Thailand – Study Tour Report

徳島大学工学部建設工学科3年 永高 裕太

タイ北部スタディツアーでの体験はとても刺激的で充実したものだだった。

初めに滞在したのはシャンティ学生寮で、モン族の学生たちと三日間の時間を共に過ごした。滞在中は子供たちと同じ部屋で寝泊まりし、寮が所有する田んぼでタニシ取りを手伝ったり、近くの公園にサッカーをしにいたり、年に一回の寮の遠足に同行させてもらったりした。

彼らとの共同生活の中で驚いたことがいくつかあった。一つはさまざまなカルチャーショックだ。ベッドに必ず蚊帳がついてることや、トイレは桶で汲んだ水を使って手で洗うこと、シャワーの代わりに水浴びをしていてその時パンツは履いたままであることなど。しかし、みんなスマホゲームが好きだったり、スケベな話が好きだったり、日本人の同い年の子供たちと共通していることもたくさんあって面白かった。個人でタイ旅行へ来ただけではわからないような、現地の生活に触れられた気がしてとてもうれしかった。

もう一つは寮で過ごす子供たちの自立度だ。寮内の掃除係や食事係は当番制で行っていて、その日の食事係の子たちは早朝に起きて朝食の支度をしていた。鳥や豚ですら自分たちでさばいてしまうと聞いたときはさすがに驚いた。寮での子供たちは基本自由に遊んでいるだけで、勉強しているような様子はほとんど見受けられなかったが、寮生の学校での成績はみな優秀で、学校の成績上位者をシャンティ寮の寮生がほとんど占めていると聞いたことにも驚いた。佐伯さん曰く、子供たちは学校での授業をとても集中して聞くことで、その日の勉強の内容を完結させているらしい。寮での規律正しい暮らしと、普段の想像力あふれる自由な時間によって、生活中的オンオフの切り替えの習慣が養われているのだ。朝起きることさえ苦手な僕は、舌を巻いたと共にとても恥ずかしい気持ちになった。



次に滞在したのはホイプム村というモン族の村で、村のあるおうちにホームステイさせてもらった。村への看板が建った山道から、山を2つほど超えてようやくたどり着いた。インフラ整備が届いていない政府非公認のこの村には、かつてトイレも学校もなく、遺伝子組み換えトウモロコシの栽培によって周りの山は荒れ果てていたという。そんな中、シャンティ山口の農村開発プロジェクトが開始された。村人全員による協働作業で生活環境改善の一環として eco トイレと保育所を建設すると共に荒れ果てた山を豊かな果樹園に変え村の未来に希望をもたらし、若者の定着により世帯も人口も大幅に増加した。民族の村の急速な変化に伴い行政当局も成果を重視し、国境警察教育隊による異例の幼稚園・小学校が今

年度から開設された。実際に村を訪れると、ところどころにトウモロコシ畑はのこっているものの、見せていただいたかつての写真とはまるで違う風景が広がっていて、植えられた果樹は着実に育っていた。実際に村の女性が世話をしている果樹園に伺ったのだが、そこで頂いたもぎたての果物は本当においしくて、にやけた僕を見て笑顔になったその女性を見たとき、佐伯さんの活動の意義や素晴らしさを、身をもって感じた。

村にはとてもゆっくり時間が流れていて、村の人たちはみな1日中のんびりと過ごしていた。なので、村に滞在中は僕も同じようにホームステイ先の家族と一緒にのんびりしたり、子供たちと遊んだり、村を探検したりして過ごした。ガスがないので料理の時はかまどで火を焚き、電気は太陽光発電だけなので、曇りが続くとき夜は家の中も真っ暗になった。一日中、なにもない場所でただのんびり過ごすことが、非日常的で不思議な体験だったが、日本で暮らしているときより自分が毎日を生きているということを感じた三日間だった。



僕は今回ツアーに同行させていただき、発展途上国の生活のリアルを垣間見た。発展途上国と聞くと、ネガティブなイメージが先行してしまっていたが、間違っていた。生活水準は日本と比べると確かに低いですが、まちは活気と人間味にあふれていて、そこで暮らしている人たちはとてもパワフルで、僕はそれに終始圧倒されていた。自分の常識とは異なる常識にたくさん出会い、世界は思うよりずっと広いと知って、自分の視野や価値観を大きく変えることができた。このような貴重な機会を与えてくださった佐伯さんと大橋先生をはじめとする、このツアーに携わってくださった方々に、心から感謝しています。本当にありがとうございました。

—永高 裕太—

.....



寮生と阿波踊り



農作業（タニシ獲り）



ホイプム村ホストファミリーと